

同窓会入会式挨拶

本日は、板倉定夫会長をはじめ同窓会役員の皆様をお迎えして、令和四年度愛媛県立吉田高等学校同窓会入会式が執り行えますことを大変うれしく思います。また、日頃は本校の教育活動に対し、物心両面からの御支援を賜り、まことにありがとうございます。この場を借りて、御礼申し上げます。

本校は、山下実科女学校の創設以来105年、吉田高等学校74年の歳月が流れ、本校の卒業生が全国各地で活躍しております。前身の私立山下高等女学校などを加えた同窓生は、22,800人に上っています。

さて、明日、卒業式を迎えられる皆さんは、今どのような気持ちですか。学び舎を巣立ち未来に向かう喜び、友達、先生と別れる寂しさ、高校生活での思い出や心残りなどたくさんの気持ちが入り混じり、複雑な心境ではないでしょうか。皆さんは、入学したときから新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、生活に制約を受け、思うように学校行事や部活動ができず窮屈な思いをし、苦しみました。苦しみを分かち合ったからこそ、これから先も同じ苦勞をした仲間として、本校の先輩としてこれからもお互いを支え、それぞれの道で努力をしてほしいと思います。

本校の歴史のスタートともなっている山下実科高等女学校を設立した山下亀三郎氏の自伝「沈みつ浮きつ」の「母のおもかげ」という節に次のようなことが記されています。山下氏が16歳で家を脱出して関西でことを成し遂げようと一念発起するわけですが、風雨のため宇和島から船が出ず、船宿に隠れているときに見つかるわけです。母から伝言を依頼された方が来られ、連れ戻されるのではないかと思いきや、「決して連れて帰るために来たのではない。いったん村を逃げて出て、おめおめ村へ帰ってくるようなことがあっては、母は家の者にも、村の者にも、なぜそういう意気地なしを生んだかと言われて、恥ずかしくって生きてはおれない、偉くなって、大手を振って村の道が歩いて帰れるようになるまでは帰ってくれな。」

という母の言葉を伝えに来たということでした。日露戦争、第一次世界大戦を経験しながらも努力を続け、山下汽船を築いて日本の海運王とまで言われるようになりました。吉田町を愛し、学校や病院の創設などを通して、郷里の発展に貢献されましたことは、御承知のところでは。

本校の同窓会は、歴史的重みを担いながら、同窓生に寄り添い、ここ吉田の学び舎で過ごした同窓のために助け合い、これからの人生を豊かなものにしてくれます。令和四年度卒業の皆さん、本校を卒業した方々は本校を誇りに思っており、同窓生として皆さんを歓迎してくれます。あなた方もこれから、全国に広がる同窓会の一員として、本校の発展を見守ってください。

最後になりましたが、愛媛県立吉田高等学校同窓会のますますの発展を祈念いたしまして、令和四年度同窓会入会式の挨拶とさせていただきます。本日は、おめでとございます。

令和五年二月二十八日

愛媛県立吉田高等学校

校長 村井 浩昭